

人と自然の博物館における資料の収蔵・保管 ～現状と将来～

松原尚志¹⁾

Conservation and Care of Collections in the Museum of Nature and Human Activities, Hyogo —Present and Future—

Takashi MATSUBARA¹⁾

要 旨

兵庫県立人と自然の博物館では、1992年10月の開館以来、地方博物館としては恵まれた環境のもと、資料収集にあたってきた。ここでは当館における資料の収蔵・保管に関する現状および問題点について指摘するとともに、これらのことを踏まえて、将来の資料の収蔵・保管・利活用の在り方に関する試（私）案の提示を行った。

キーワード： 兵庫県立人と自然の博物館，資料，収蔵庫，収蔵・保管・利活用，現状・将来

はじめに

資料の収集・保管は自然史系博物館において普及・教育や展示活動の基盤となる、最も重要な機能の一つである。兵庫県立人と自然の博物館では1992年10月の開館以来、地方博物館としては恵まれた体制のもと（e.g. 小林, 1998）、館員収集、購入、寄贈、交換などにより、県下はもとより国内外各地の自然・環境に関する資料の収集にあたってきた。

ここでは、人と自然の博物館における資料収蔵・保管に関する現状と問題点を整理し、それらを踏まえた上で、将来の収蔵資料の収蔵・保管のありかたについて、試（私）案の提示を行う。

人と自然の博物館における資料の収蔵・ 保管の現状と問題

現状

人と自然の博物館の収蔵庫はすべて研究・収蔵棟内に

設置されており、1階に地学系収蔵庫（581.18m²）、液浸収蔵庫（228.87m²）、多湿収蔵庫（61.86m²）および種子保存収蔵庫（31.55m²）が、2階に生物収蔵庫（1,242.97m²）と環境系収蔵庫（178.21m²）が設置されている。また、そのほかの収蔵室としては同棟1階に仮保管庫（52.59m²×2）と冷凍庫室（42.13m²）が、3階に図書室（209.81m²）がある（図1）。これらのうち、地学系収蔵庫には化石、岩石、鉱物、ポーリングコア、剥ぎ取り標本が、液浸収蔵庫には貝類（乾燥）、魚類（液浸）、哺乳類（剥製、骨格、液浸）標本が、生物系収蔵庫には昆虫等、植物（さく葉）、菌類、鳥類（剥製、巣、卵）標本が、環境系収蔵庫には古文書、古絵図、古写真、都市景観模型、自治体誌・史などがそれぞれ収蔵されている。これら収蔵資料は温度・湿度変化および光による劣化を避けるため、恒温恒湿（20℃、50%）、作業時を除き無光の環境下に置かれている。

資料の整理・保管および資料データの入力については、37名の研究員に加えて8名の日々雇用職員（生物系資料4名、地学系、環境系、液浸、種子資料各1名）が行っ

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目 Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

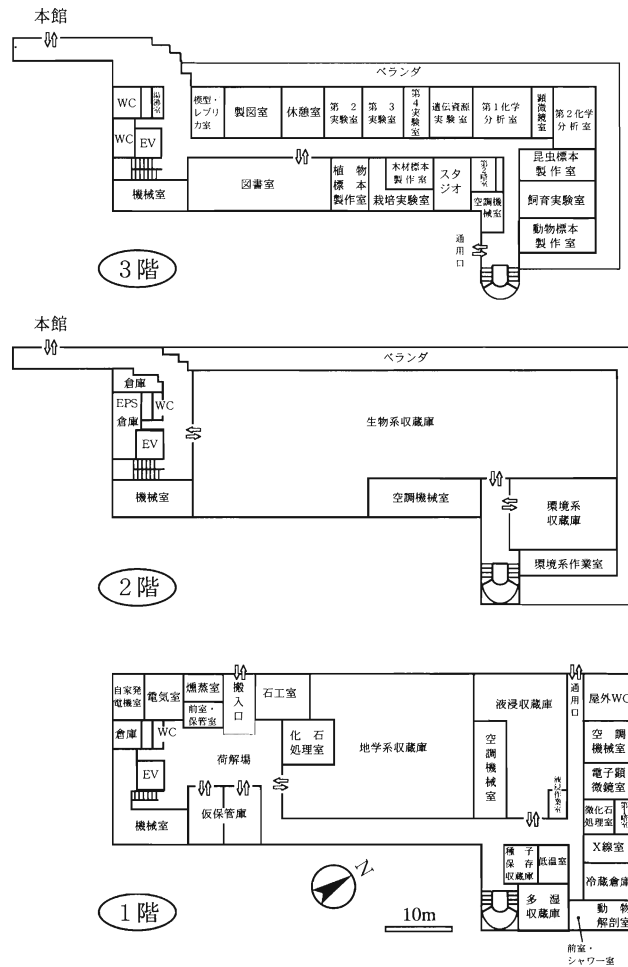


図1 兵庫県立人と自然の博物館の研究・収蔵庫棟の間取り（兵庫県立人と自然の博物館，1994a編を改作）。

ているほか、当館研究員の専門外の分野の資料については年に数日間、数名の専門家を招聘し、同定・整理を進めている。

2003年度末現在での収蔵資料受入点数は昆虫等が949,993点、植物等が264,724点、地学系が43,429点、動物が31,284点、環境系が6,566点で、これらの中には、昆虫等約900点、植物約20点、化石約40点のタイプ標本をはじめとする学術資料が含まれる。尚、収蔵資料目録としてはこれまでに4編（昆虫：兵庫県立人と自然の博物館系統分類研究部，1995編；Hashimoto and Nakanishi, 1997；八木・沢田，2001編；現生貝類：坂田，1999編）が出版されているほか、図録2編が当館英文紀要「Nature and Human Activities」に公表されている（化石：Kobayashi and Ujimarū, 2000；Matsubara, 2004）。

これら収蔵資料データベースは共通の管理システムにより一元管理され、館内の端末からのデータ入力・検索が可能となっている。このデータベース管理を含めた博物館情報システムについては情報管理課の3名の博物館職員と民間からの出向社員2名が維持・管理にあたって

いる。

問題点

(1) 収蔵スペース

収蔵・保管に関する最も大きな問題は一どの博物館においても開館後、収蔵資料の増加に伴い直面することであるが（e.g. 糸魚川，1993）—収蔵スペースの不足である。収蔵資料受入点数は、開館した1992年度に昆虫等が215,372点、植物等が92,057点、地学系が11,723点、動物が13,728点、環境系が4,377点であったのが、その後の収集活動により開館後12年後の2003年度末には昆虫等が約4.4倍に、植物等が約2.9倍に、地学系が約3.8倍に、動物が約2.3倍に、環境系が約1.5倍にそれぞれ増加している（図2）。このような収蔵資料の増加に伴う収蔵スペースの不足は、とくに生物系収蔵庫と地学系収蔵庫のほか、図書室において深刻な問題となっている。

(2) 種類や収集・保管目的の異なる資料の「同居」・「雑居」

自然史資料の採取・作製・収蔵・保管方法は標本の種類により実に多様であり、それぞれの資料にとって適し

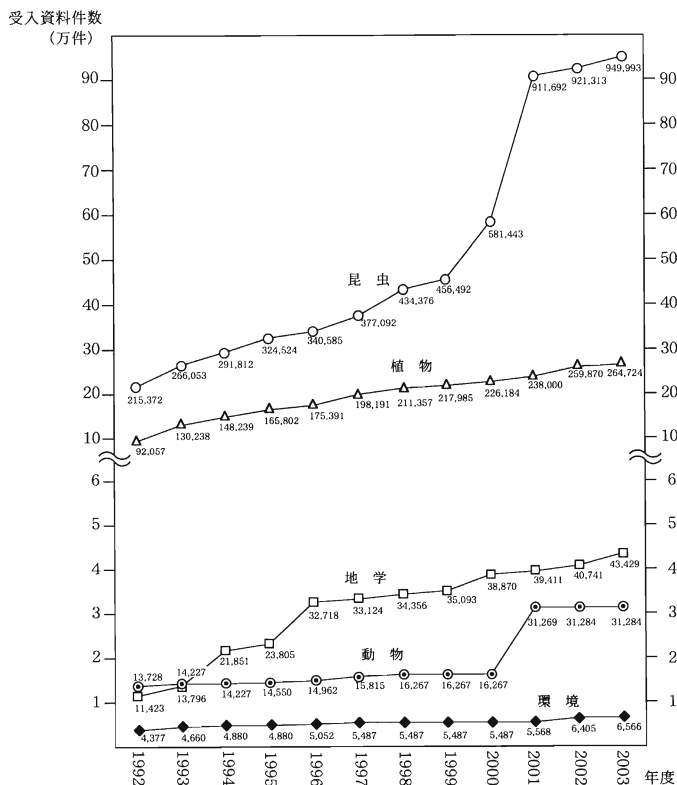


図2 兵庫県立人と自然の博物館における収蔵資料受入点数の変遷。1992年から2000年度のデータは兵庫県立人と自然の博物館(1994a-2001編)による。

た条件も当然異なる (e.g.松浦, 2003編著)。当館の生物系収蔵庫では収蔵区画や棚は異なるものの、昆虫や植物、鳥類標本など、本来、別の収蔵庫に収蔵すべき資料が「同居」している状態にある。また、この「同居」の問題に加えて、いずれの収蔵庫においても学術資料や寄贈資料、教育・普及用資料など、収集・保管・利活用目的の異なるものが連続した登録番号を与えられ、同じ区画内に「雑居」しているのも好ましくない。

(3) 収蔵庫の公開

収蔵庫は原則として非公開であるが、1996年度より例年11月上旬に開催されている「ひとくフェスティバル」での見学ツアーを中心とした一般公開により、外部入庫者数は2001年度には325名(のべ人数、以下同じ)、2002年度には635名、2003年度には786人と増加している(兵庫県立人と自然の博物館, 2001編, 2002編)。このことは、博物館における資料の収集・整理・保管の意義を理解してもらおうといった観点から見れば悪いことではない。しかしながら、収蔵庫は収蔵資料の半永久的な収蔵・保管を目的とした施設であり、展示室のような大人数の出入りについては想定していない。一方、当館では2002年度以降、環境問題への配慮から生物系収蔵庫全体の大規模薫蒸は行わず、代わりに収蔵前に小薫蒸室での薫蒸や超低温冷凍庫(ディープフリーザー)による

防除と収蔵庫内の定期的モニタリングを行っている(秋山, 2002)のみとなっている。これらの防除策は収蔵庫内に害虫が存在しないことを前提としており、収蔵庫見学者の増加は収蔵資料の中でも特に虫害を受けやすい植物さく葉標本に対して、今後深刻な問題を引き起こす可能性がある。

人と自然の博物館におけるこれからの資料の収蔵・保管

当館が今後、さらに地域の自然・環境に関する資料の充実を図って行くためには、上記のような諸問題の総合的な解決をはかることを考慮しなくてはならない。生物系収蔵庫は昆虫・植物・動物の各収蔵庫に再編・拡充し、また、地学系収蔵庫からポーリングコア収蔵庫を分離・独立させる必要がある。さらにそれぞれの収蔵庫については二分し、学術資料(研究・保管・保全用資料を含む)と展示・教育・普及用資料とを分離した上で収蔵・保管できる体制を整えることが必要である。

このような資料の特性に応じた収蔵・保管体制の合理性は、大学図書館等における収蔵図書分野別および開架図書、書庫収蔵図書、貴重図書といった収蔵・保管区分と比較すれば分かりやすい。すなわち、通常は次世代

への継承を目的として安定した条件下で收藏され、必要に応じて利用される学術資料は貴重図書・書庫收藏図書に、一般公開されている展示・教育・普及用資料は開架図書に対応することとなる。このような分別のほか、すでに国内でもいくつかの博物館で実施されているインターネットを通じた利用規定や收藏資料データベースの公開に加えて図書館の「閲覧室」にあたる外来者用研究室の設置も、外来者による資料の学術的利活用を促進する上では必要となる。

博物館における資料収集・整理などの活動については人の目に触れることがほとんどないため、一般にはその重要性がほとんど理解されていない(斎藤・森, 1998)。この問題への対応として、当館を含むいくつかの博物館では年に数回の收藏庫の一般公開を行っている。しかしながらこのような方法では見学可能な人数には限りがあり、また、セキュリティや上記のような害虫防除の観点からは好ましいとは言えない。むしろ館内に普及・教育用資料を活用した各種の展示用收藏庫を設置し、そこで来館者が資料収集・保管の重要性について理解できるような展示や解説が必要となるだろう(e.g. 大英博物館ダーウィンセンターのホームページ)。

おわりに

近年、地方の大型博物館には地域の自然・環境に関する研究・教育の核となる資料・情報センターとしての役割も期待されている(糸魚川, 1999)。このような観点からも地域の自然史・環境に関して重要な資料を収集し、学術的な知識に基づきいつでも利活用が可能なように整理・保管していくことは、当館が将来、そのような役割を担っていく上で、今後ますます重要となってくるものと思われる。

文 献

- 秋山弘之(2002)植物標本を有する收藏庫における害虫・黴対策について。植物分類学会ニュースレター, no. 6, 8-12.
- Hashimoto, Y. and Nakanishi, A. (1997) A list of the type-specimens of Hymenoptera described by K. Tsuneki in the Museum of Nature and Human Activities, Hyogo (MNHAAH). Cat. Coll. Mus. Nat. Human Act., Hyogo, no. 2, [4] + 47 p., 8 pls.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1994a編)館報 1992. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 67 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1994b編)館報 1993. 兵庫県立人と

- 自然の博物館, 三田, 72 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1995編)館報 1994. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 74 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1996編)館報 1995. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 84 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1997編)館報 1996. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 92 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1998編)館報 1997. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 102 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(1999編)館報 1998. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 110 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(2000編)館報 1999. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 111 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(2001編)館報 2000. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 142 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(2002編)館報 2001. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 123 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館(2003編)館報 2002. 兵庫県立人と自然の博物館, 三田, 115 p.
- 兵庫県立人と自然の博物館系統分類研究部(1995)日本産蛾類標本(米田コレクション). 兵庫県立人と自然の博物館收藏資料目録, no. 1, 63 p., 4 pls.
- 糸魚川淳二(1993)日本の自然史博物館. 東京大学出版会, 東京, 228 p.
- 糸魚川淳二(1999)新しい自然史博物館. 東京大学出版会, 東京, 229 p.
- 小林文夫(1998)自然史系博物館の研究活動—現状と今後の課題—. 地学雑, 107(6), 822-829.
- Kobayashi, F. and Ujimar, A. (2000) Chinese fusulinaceans kept in the Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Japan. Nat. Human Act., no. 5, 5-25.
- 松浦啓一(2003編著)標本学—自然史標本の収集と管理—. 東海大学出版会, 東京, 250 p.
- Matsubara, T. (2004) Catalogue of the Pliocene Mollusca from the Tōnohama Group in Kōchi Prefecture, Shikoku, Japan, in the Museum of Nature and Human Activities, Hyogo (Takao Sendō Collection). Nat. Human Act., no. 8, 49-95.
- 斎藤靖二・森 啓(1998)自然史資料の収集・保管と利用. 地質ニュース, no. 532, 35-40.
- 坂田宏志(1999編)日本産貝類—菊池コレクション—目録. 兵庫県立人と自然の博物館收藏資料目録, no. 3, [vi] + 63 + [18] + [18] p.
- 八木 剛・沢田佳久(2000編)ママエフコレクション目録. ユーラシア産双翅目, 鞘翅目標本. 兵庫県立人と自然の博物館收藏資料目録, no. 4, [10] + 49 p.
- 付記
大英自然史博物館ダーウィンセンターのホームページ
[<http://nhm.ac.uk/darwincentre/>]